齋藤 由美子

カフカ『変身』多和田葉子訳——多和田葉子編『ポケットマスターピース 01　カフカ』（集英社文庫、2015 年）所収

多和田葉子の新訳「変身（かわりみ）」の魅力はじわじわ読者に迫ってくる。タイトルのインパクトは強いが、そのおもしろさも読み進めるにつれて増していく。まず驚かされるのは、「ウンゲツィーファー（生け贄にできないほど汚（けが）れた動物或いは虫）」。この語に対応するドイツ語 Ungeziefer は unruhig と ungeheuer という語の後に続くのでどうしても un の音に気を取られるが、「ウンゲツィーファー」とカタカナでいきなり出てくるとまるで印象が違う。語源の説明からおどろおどろしいものを感じさせる一方で、動物あるいは虫という二つの選択肢を与えられたために具体的な生き物を想像し難く、「ウンゲツィーファー」という音の「カイブツ」だけがはっきりと記憶に刻まれる。なお、その後も「動物の声」、「猫の餌入れ」、奇妙な造語「虫獣」、最後の息が吐き出される生生しい「鼻の穴」（ドイツ語では Nüster、とくに馬の鼻孔を指す）等の言葉によって不可解さは深まる。「複数の夢の反乱」にも脱帽！そこでは unruhig（不安な）という形容詞が使われているが、その名詞形 Unruhe には「暴動」という意味がある。いくつかの不安な夢を次々に見たというよりは、複数の夢がいっせいに反乱を起こしているとんでもない状況である。そんな夢から目覚めたグレゴールは「姿を変えてしまっていることに気がついた」。つまり、グレゴールは自ら姿を変えたのだ。「僕の身にいったい何が起こったんだろう」。「～の身に起きる」という言い方がそこでは妙に響く。僕ではなくてあくまで僕の「身」に起きたのだ。「身」はその後「身体」となって、原文では「身体」に対応する Körper はさほど使われていないにもかかわらず、その後も執拗に何度も出てくる。グレゴールは慣れない身体を動かすことに四苦八苦しているので、身体が独立した生き物のように描かれているが、「身体」という語の嵩張りが言葉の上でもその存在感を示す。

なによりハッとさせられたのは「寝台（Bett）」という語だ。新訳なのに古臭さを感じさせる。にもかかわらず、この語によってカフカの「変身」を新たに発見できた気がする。カフカの作品の中で「Bett」が重要な役割を担っているということはこれまでも指摘されてきた。「変身」の 1 章でもとにかく Bett から抜け出そうとするグレゴールの試みが詳細に描かれ、この語が非常にしばしば現れる。多和田はそのほぼすべてを「寝台」と訳しているので一際目立つ。さらにそこから出ようとしているのは「身体」であり、この二語が交互に畳みかけられていく。音の類似からこれらがぴったりとくっついてなかなか分離できないような気がしてくるが、グレゴールは父と女中が手伝って「果物の皮」（！）「でも剥くように寝台から引きはがして」くれればと想像して微笑むのだ。しかしその後しばらく「寝台」はぱたりと出てこなくなる。2 章ではグレゴールがのびのび這いまわれるように家具を取り除くのだが、一番邪魔になりそうな「寝台」についてはまるで語られない。この章の終りの方で一度だけ「寝台」という語が出てくる。かつての父の描写が「寝台の中に埋葬されたように横たわっていたあの父親」と翻訳されているので、墓石のようにも見えてくる。なにより、3 章でグレゴールの「死」の知らせを両親が聞くのは「寝台」の上である。ドイツ語では二度繰り返される「krepieren（家畜が死ぬ、人間がくたばる）」が、あえて「くたばりましたよ。完全に死んでいます」と言い換えられて訳されている。「死」という語のせいで、続く母親の「死んだの？」という言葉、さらに繰り返される「死体」という語とともに「寝台」と「身体」と「死」が結びつく。「寝台（死ぬ台）」という言葉は死の儀式を執り行う場であるかのよう

な不気味さを感じさせる。この作品は妹が若々しく「身体」を伸ばしたところで終わるが、「死」を連想させる「死ぬ体」は不吉な証のようだ。
ちょうどこの翻訳を読み直していたとき、日本からベルリンに来ていた訪問客の言葉が気になっていた。夜道を歩いていて「日本は明るいんだな」とつぶやいた。ドイツは町中でも薄暗い道が多い。多和田の訳から気付かされたのは、日本語の表現の中でも「明るさ」は重視され「明るい」という語がしばしば使われるということだ。原文では灯りが家族のいる食卓を照らしているところが、「家族が明るい食卓を囲んでいる」と訳されているので、楽しい家族のだんらんが皮肉にも想像される。最後の場面では「日の光に満ちた」車両で、家族の状況について「将来は明るく」と表現されている。原文では家族の将来の展望は「悪くない（nicht schlecht）」というところだ。日の光の明るさは、グレゴールが生きていた時の部屋やそこから見る外のほの暗さと対照的である。グレゴールの痕跡を消しさるような明るさが家族の未来の「明るさ」と直結され、結末の後味の悪さは一層強まる。新訳「変身（かわりみ）」は日本語でカフカの作品を読む幸福をたっぷり味あわせてくれる翻訳だ。